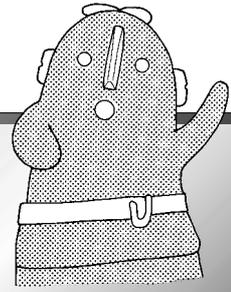


# 塩西原 18号墳



## はじめに

西原18号古墳は、町の南西に位置する塩古墳群(7支群98基)中の一つで、古墳群の中ではやや大きな円墳です。古墳は滑川の沖積地に面する標高65m程度の丘陵下位に築造されています(第1図)。

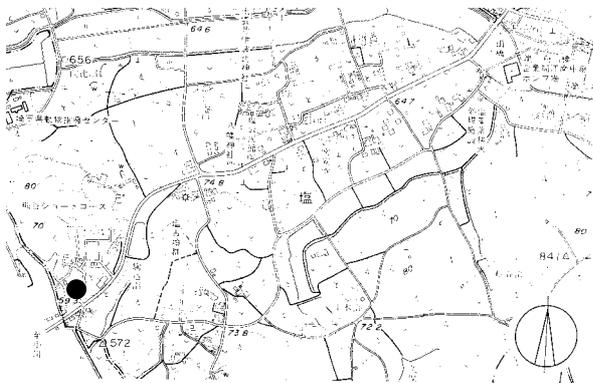
古墳は1989年に山林造成に伴い、江南町教育委員会によって発掘調査が行われました。その結果、保存状態の良い横穴式石室が発見され、古墳時代後期の武器や馬具、土器や埴輪など貴重な資料が多数出土しました。今回はこれらの出土遺物を中心に、紹介してみたいと思います。

## 古墳の概要

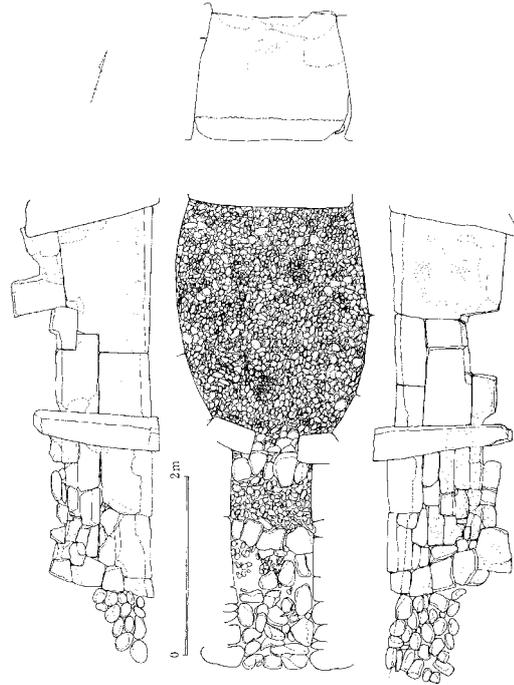
調査の結果、古墳は直径22m・高さ3mの円墳であることが判明しました。

古墳の周囲には幅3m、深さ1mの周堀しゅうぼりが巡っていますが、北東側と南西側の2箇所においては幅が倍になる部分があります。

周堀の中からは埴輪の破片が多量に出土しており、古墳の裾等にその配列を予測することができます。



第1図 古墳の位置 (1/20,000)

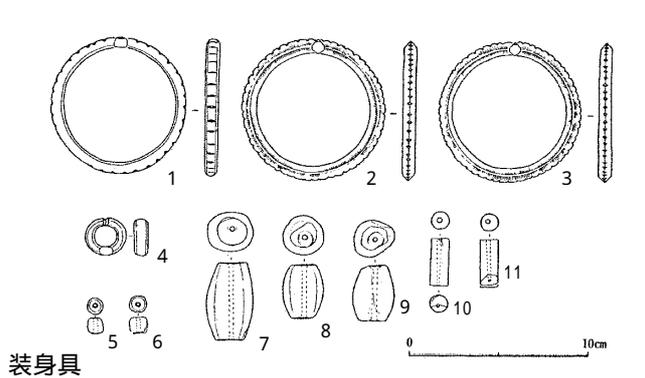


第2図 石室実測図

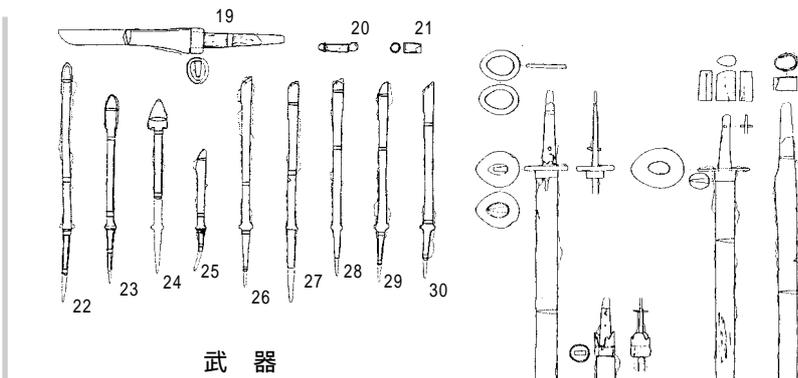
埋葬施設である石室の平面形態は単室の胴張り型横穴式石室と呼ばれるもので、壁体には羨道前半部分に河原石、それ以外は凝灰岩の切石を積んでいます(第2図)。なお切石の一部には切り組みと言う技法を用いており、荷重の均等配分を考慮した構造となっています。

天井石の大半は調査時点ですでに失われていました。しかし一部は石室内に落下した状態で確認され、凝灰岩や緑泥片岩が用いられていたことがわかりました。

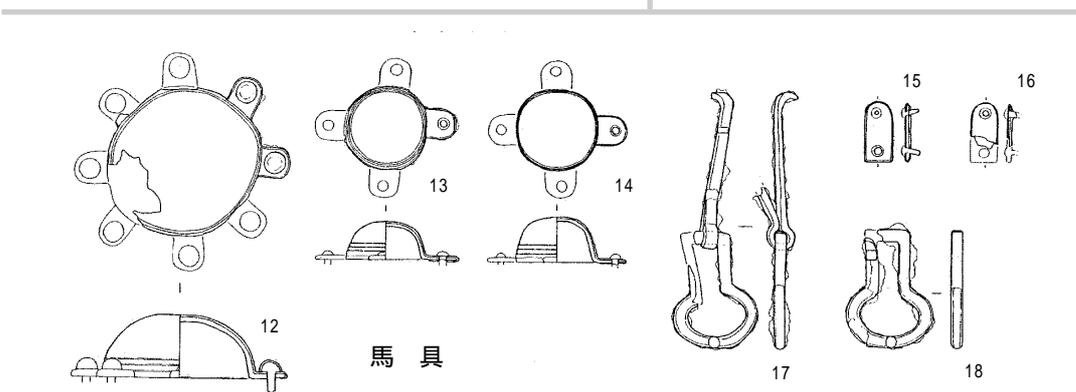
石室の入り口、羨道の前半部分には河原石を充填した閉塞施設が設けられており、これを取り外すことによって石室は幾度か使用されたものと考えられます。



装身具



武器



馬具

## 出土遺物

石室の内部からは、死者と共に収められた副葬品が大量に出土しています。副葬品には装身具・馬具・武器が確認されました（第3図）。

装身具は、1～3番が銅釧（腕輪）、4番が青銅に鍍金を施した耳環（耳飾り）、5～11番が玉類です。玉類の内訳は5・6番が土製の丸玉、7～9番が琥珀製のナツメ玉、10・11番が碧玉製の管玉です。なかでも琥珀製の玉は県内でも出土例が少なく、非常に貴重なものと言えます。

馬具は12番が雲珠、13・14番が辻金具という鉄に金銅を被せたもので、共にベルトの交点につけられる飾り金具です。

15・16番はベルトの先端に装着される帯留金具で、雲珠と辻金具同様、鉄に金銅を被せたものです。

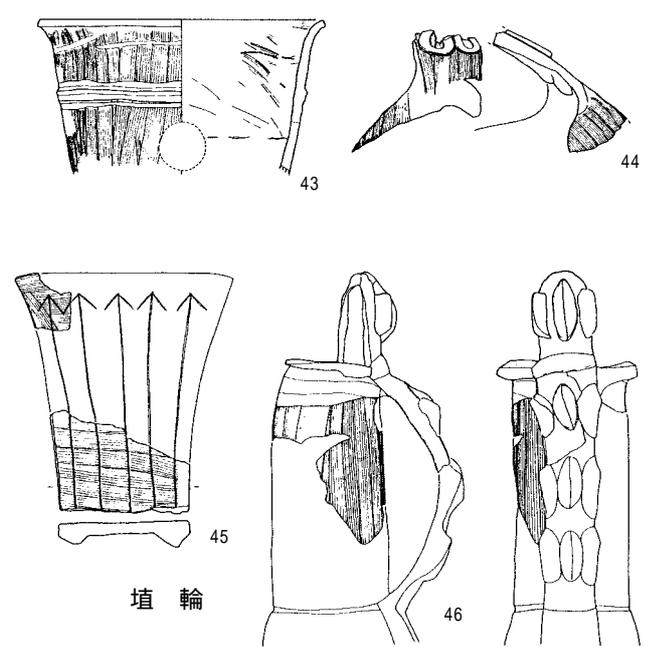
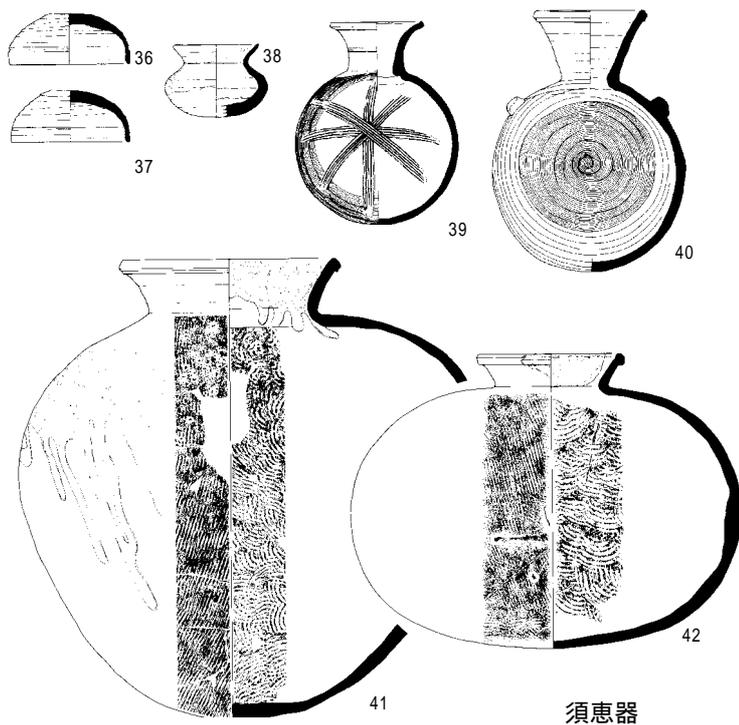
17・18番は鞍金具と言われるもので、鞍とベルトを連結する金具です。鞍に取り付けられる

部分と、ベルトを結び留めておく部分の大きく2つの部品に分けられ、鉄製です。

なお出土馬具について注意される点として、鞍金具以外に鞍に付属する金具が見られない事があげられます。これは鞍本体が、木材等の材質である事を暗に示していると考えられます。

武器類は19番が刀子、20番が飾り弓の金具、21番が刀装金具、22～30番が鉄鏃（矢じり）、31～35番が直刀（反りの無い刀）です。

直刀の中には、鐔の金具に銀線を埋め込んだ模様が施される31番（象嵌大刀）や、柄元の部分に波形の銀板を装着した32番（銀装大刀）、鉄製の柄頭金具を伴う34番（圭頭大刀）が含まれており、象嵌大刀は県内で優品に数えられ、銀装大刀に至っては国内でも極めて稀なものです。



第3図出土遺物

石室前や石室入口からは多くの土器が出土しました。出土した土器は須恵器と呼ばれる硬質で灰色の焼き物で、5世紀に朝鮮半島から伝わった技術で製作されたものです。

36・37番は蓋ですが、受身に相当する器が見当たらない点から、蓋として生産されたものの受身に転用された可能性が考えられます。

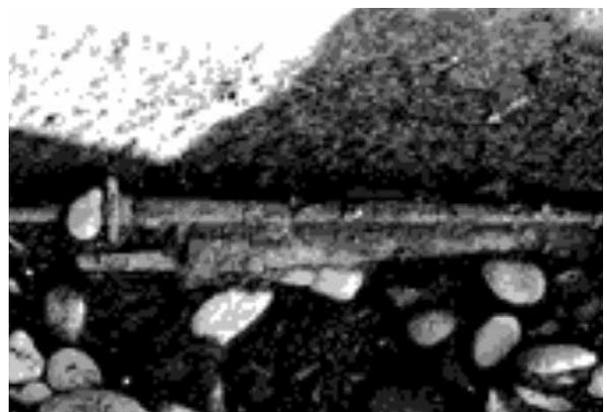
38・39番は互いに大きさ・形の異なる壺です。特に39番はその形や製作技法から、東海地方に多くみられる「フラスコ形瓶」との関係が強うかがわせるものです。

40番は提瓶と呼ばれ、肩部には二つの突起がついています。この突起は本来リング状であった把手が退化したもので、この提瓶が新しい段階のものである事を示しています。

41・42番は大形の壺で、特に42番は俵に似た特徴的な形状です。

これらの土器は石室前で行われた、死者を弔う祭りに際して用いられたのでしょう。

古墳の裾からは埴輪が出土しており、大半は円筒埴輪でしたが、大刀・鞆・鞆と呼ばれる武器・武具を象った埴輪も多少見られます。武器・武具を象った埴輪は、古墳に埋葬された人物の権力の象徴でもあり、石室内部に副葬された多量の武器との関係で興味深いものです。



石室内大刀出土状態

## おわりに

以上紹介してきたように、塩西原18号墳からは調査の結果、豊富な副葬品をはじめ土器・埴輪などの多量の出土品が発見されました。

出土品はおおむね6世紀後半（1400年前）に属するもので、塩西原18号墳の造られた時期を知ることができます。

では西原18号墳に葬られた人とは、一体どんな人物だったのでしょうか。本古墳は、その規模や石室の構造が周辺に数多く分布する古墳よ

りも抜きん出ており、この点から本古墳に葬られた人物が、周辺の古墳に葬られた人々よりも権力をもっていたことは容易に想像されます。さらに副葬品の中に存在する多量の良質な武器類からは、この古墳に葬られた人物の軍事的な優位性がうかがえます。

< 江南町教育委員会 >



塩西原18号墳石室全景

